
ピンポンダッシュ

ゼーデ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ピンポンダッシュ

【コード】

N2108H

【作者名】

ゼーデ

【あらすじ】

菜摘と慧美はピンポンダッシュのうわさを聞き、張り込みを始める。犯してはいけないタブーとは？そして双子の正体は？

ピンポンダッシュ 1

長かった1週間もやっと終わり、今は下校の時間だ。
はあ、家に帰ったら何しよっかな。

「なーっつみー！」

「え？何？」

親友の慧美が目を輝かせて何かを話そうとしている。

何かめんどくさいことに巻き込まれそうな予感。

慧美は何かロクでもないことを思いついた時はいつもこうだ。

「ねえねえ、菜摘！ピンポンダッシュの双子知ってる？！」

やっぱり、案の定訳の分かんないことを言い出した。

「知らないよ、そんなの。てか何それ？」

「何か、ピンポンダッシュするんだって。」

「いや、それじゃ全然分かんないだろ。」

やっぱり慧美は変わった人だ。

6年間親友やってきたが不思議なオーラは相変わらずだ。

「えっと、可愛い双子でね、ピンポンダッシュするの。そうすると、何か誰も映ってないインターホンから声がするんだって。」

「はあ？それだけ？それで、何て言ってるの？」

全然オチもない話だ。

「分かんない。バラバラなんだって。それに時よって。」
慧美は平然と答えた。

「たとえば？」

「うーん・・・私が聞いた話では、遊ぼうとかそんな感じだった。」

「ふーん。」

「ねっ、でもさ見てみたいよね!?!」
どうやら慧美は本当だと思っているらしい。

「全く・・・。そんなのいるわけないじゃん・・・。」

「それがね、近所で見たって言う人結構いるんだって!!--」
慧美は自信ありげに言っている。

「そりゃないでしょー。」

「でもね、タブーを犯すと双子に殺されちゃうんだって。タブーの内容はよく分かんないけど。実際に行方不明者が出てるんだってば!!--」

「はあ、何言ってるの。まるで小学生レベルの怖い話じゃん。」
私は半ば呆れてしまった。流石に高校生になってまでこんな話を信じるとは。

「というところで、明日休みだから張り込みしない?ちようど父さん

も母さんも旅行だし！」

もう駄目だ。慧美はこうなるともう止まらない。

「ええー。いやだしー。」

無駄だと分かりつつも、私は自分の休日を保護するために反論したがその努力もむなしく・・・。

結局、慧美の家で一日張り込みをすることになった。

ああ、それにしても私の貴重な休日が・・・。

翌日。

早速、慧美の家で張り込みが開始された。

その後三時間たっても何にも起きず、時はただ過ぎて行った。

もう二人とも本来の目的を忘れ、お菓子を食べたり、ゲームをしたりしていた。

・・・ピンポーン

「ああ、はいはい。」

そう言いながら慧美は玄関へ行った。

「わあっ！菜摘！！ちよつと来てー！」

突然慧美が大声を上げたので、何事かと思って急いで玄関へと向かった。

「慧美！？どうした・・・の？」

「あ、菜摘！インターホンから声がするの！やっぱりホントだった

んだ！」

よく聞くと確かに“遊ぼう”と声がする。

その時、私は言いようのない不気味さを覚えた。

「菜摘、遊ぼうって言ってみない？」

慧美はすっかり舞い上がってしまったている。

「慧美、何かヤバくない？やめておこうよ……。」
私はなんだか気持悪くなってそういった。

「だいじょぶだって。いや、遊ぼう！」

慧美は勝手に返事をしてしまった。

「ホント!？」

そう声が出たかと思うと、玄関のドアが勝手に開いた。

そこにいたのはそっくりな顔をした可愛い双子だった。

ピンポンダッシュ 1 (後書き)

長くなっちゃいましたw
すみません。

ピンポンタッシュ 2

そっくりなかわいい双子。

男の子と女の子で男の子は少しくせつ毛らしく、黒髪がくりんとはねていた。

女の子は肩くらいの長さの黒い髪で、前髪を花のピンでとめていた。

どっちも色が白くて、少し茶色がかった大きな目をしていた。

ホントに幽霊とは信じられないほど可愛い双子だ。

けれど格好が古臭い。どうやっても今時のものには見えないのだ。

というより普段着にしては、少し立派すぎる服装だ。

どちらもお揃いのシャツにジャケットを着て、男の子のは短いズボンにサスペンダーがついていて、女の子はレースの付いたひざ丈のスカートをはいていた。

なぜかそこに異常な違和感を覚えた。

「菜摘！！何して遊ぶ？」

ふと考えていると慧美が私を呼んだ。

「え……何って……。」

「だから、この子たちと何してあそぼっかって!」

双子たちは目を輝かせてこっちを見つめていた。

「うー……。えっと……。何がしたい?」

私は双子に聞いてみることにした。

「ぼくはね、かくれんぼがいい!」

男の子が答えた。

「ええー! いやだあーゆみはおにごっこがいいー!」

女の子が不満そうに答えた。どうやら名前はゆみというらしい。

「うーん……。じゃあ先におにごっこやるつよ。」

男の子がゆみちゃんにそういった。

男の子のほづがゆみちゃんよりどこか大人っぽい感じがする。

「ホント?! やったあ! ゆうありがとー!」

ゆみちゃんはよっぽどうれいいのかぴよんぴよんと跳ねている。

「はい! じゃあ鬼を決めよう!」

慧美が手をたたきそうだった。

「いい? いくよ。じゃーんけーんぽん!」

「あーまけちゃった……。」

最初の鬼はゆみちゃんになった。

「じゃあ10びょうかぞえるね!!!いち、にーい、さーん……

ゆみちゃんが数えてる間にそれぞれ家の中のどこかへ逃げた。

「あっ!おねーちゃんいたあ!」

そう言っつてゆみちゃんがこっちへ走つてきた。

このくらいの年の女の子にしては、結構足が速い。

「たーっち!」

「わあーつかまつちゃった!」

私はわざと遅く走り、ゆみちゃんにタッチをさせた。

「じゃあ!こんどはおねーちゃんがおにだよ!」

ゆみちゃんはとてもうれしそうにそういった。見ていると、とても微笑ましく思える。

そのあと鬼ごっこをしばらくやったら、さすがに疲れてきたらしく、かくれんぼをすることになった。

鬼は私になった。皆それぞれの場所へ隠れたそのときだった。

「いたっ!」

ゆみちゃんの声が聞こえた。

急いで見に行くと、何とゆみちゃんの足に包丁が深々と刺さっていた。

「いたい!いたい!!!おねーちゃんいたいよー!!!」

そう叫ぶゆみちゃんの足からは血が流れ出ている。

とりあえず出血を止めようと、ゆみちゃんの足から包丁を抜いてハ
ンカチできつく縛った。

ゆみちゃんはその間痛いと呼び続けていてとてもかわいそうだった
が、何とか我慢してくれた。

話を聞くとどうやら台所へ隠れたゆみちゃんが、棚の中へ隠れよう
と戸をあけたはずみで、上にあった食器がごから包丁が落ちてきて、
それが足に刺さってしまったそうだ。

どっちにしろ、このままではやばい。病院へ連れて行かなくてはと
思っていると、二階から慧美とゆう君が降りてきた。

「どうしたの？」

慧美が私に聞いてくる。

「それが・・・かごから包丁が落ちて、それが足に刺さったらしく
て・・・。とにかく病院に連れてかなきゃ・・・。」

「えっ?! ゆみ! 大丈夫?!」

ゆう君がそう言いながらゆみちゃんの方へと駆け寄って行った。

「どうしよう・・・。車とか運転できないし。救急車呼ぶ？」
私は慧美に聞いた。

「うーん・・・でもさあ、この子たちって幽霊だよね? 病院連れて
つても・・・。」

慧美はそういった。確かに言われてみればそうなのだが、血が出て
いるとそういうわけにもいかない。

「でも、出血してるし・・・、やっぱり連れてったほうがいいよ！」
私は慧美に言った。

「大丈夫だって。そんなさあ、だって考えてみなよ？幽霊だって血まみれ出て来たりするじゃん。だからきつと・・・」

「何言ってるの・・・？」

慧美のいいかけた言葉を遮ったのはゆう君だった。

その声は今まで聞いたどの声よりも、低くて太く、とても気味悪かった。

「え・・・、何って・・・だって君たち幽霊だよな？だったら病院いなくても・・・」

慧美がゆう君に言い返した。こういうところは慧美の長所でもあり、短所でもある。

ゆう君にとっては慧美の発言は後者に思われたらしい。

「何で？幽霊だって痛いんだよ・・・？夕実が・・・夕実が可哀想・・・。」

ゆう君の声はさらに低くなる。私はいやな予感がした。

「ゆう？ゆみは大丈夫だよ？」

ゆみちゃんもゆう君に向かって言う。あれだけ酷い怪我をしたのに、なんて強い子なんだろう。

私はゆみちゃんの我慢強さに感心した。

「だめだよ夕実。病院いかなきゃ・・・。もしも夕実が死んだら、僕も死ぬ。」

ゆう君は相変わらず低い声で静かに言った。その声がやけに響いて

居心地が悪い。

正直言つて、ゆう君のゆみちゃんに対する執着心は普通じゃない。なぜここまでするのか私には分からないが。

「ほら、ゆみちゃんも大丈夫って言ってるし。ね、ゆう君？」

慧美がそう言った。でも私にはその言葉は言っではいけないような気がした。

ゆう君が顔を上げた。目が驚くほど鋭くなっている。

「……わかったよ。じゃあお姉ちゃん。お姉ちゃんも、僕らの痛みを味わってみて？」

「……え……？」

過去

・・・どういこと・・・？

私はゆう君の言葉を聞いた時、とても嫌な予感がした。

私の中の危険信号が点滅している。

逃げなきゃヤバイ・・・。

直感的にそう思った。

「慧美、逃げよう！何かやばいよ・・・！」

慧美に囁くようにそう言ったが、慧美は全く聞いていない。

「何言ってるの？大丈夫だって・・・。嘘だよ絶対。」
慧美は笑いながらそう言っている。

「じゃあ、最後は僕が鬼になるね。」
ゆう君は笑顔でそう言った。さっきのことはまるで嘘だったかのよう
に明るい。

「じゃあやろうー！」
ゆみちゃんがそう言った。

私は今すぐにも逃げ出したかったが、なぜか家をすぐに出ようとは思わなかった。

結局、私たちはゆう君を鬼にして、もう一度かくれんぼをすることになった。

どうやら慧美は二階へ隠れたらしい。

私とゆみちゃんは一階の和室の押し入れの中に隠れた。

しばらく沈黙が続いた。

「……ゆみちゃんは、ゆう君と仲良しだね。」

私は、何とかこの沈黙を破ろうと口を開いた。

「うん！ゆうはいつも優しいんだ！」

ゆみちゃんはとてもうれしそうに言う。

「ゆうがね、いつもゆみのこと助けてくれたの。」

「助けてくれた……？」

「そう！ゆみがいじめられててもね、いつもゆうが助けてくれたの。」

「そっか……。優しいんだね。ゆう君は。」

私は笑顔でそう言った。

「うん！！自慢のお兄ちゃんだよ！」

「でもね……。」
突然、ゆみちゃんが顔を曇らせた。

「ゆうがね、ゆみを守ろうとしてくれるんだけどね、何か最近へんなんだ……。」

「変？」

「うん……。なんかこわい。昔はすごく優しくかったのに……。」

「……。」

不安が大きくなる。やっぱり危険だ……!!

「ゆみはね……。昔ね、おつきなおうちにすんでたの。ほんとにおーつきかったんだよ！でもね、パパとママがね交通事故で死んじやったの。ゆみとゆうだけが残されたんだ。」

ゆみちゃんは悲しそうな顔をした。

「それでね、親戚のひとのおうちにすむことになったの。でも、この人は意地悪でね、パパとママのお家も物もお金もぜんぶ自分たちのものにしちゃったの。」

「うん……。」

とてもかわいそうだと思った。まだこんなに小さい女の子がこんなつらい人生を歩んできたなんて。

「それにね、その人たちはゆみとゆうをいつもいじめめるの。ゆみはいつもいじめられて泣いてばかりだった。そのうち、その人たちはパパ達の財産を使い果たしてお金が無くなったの。まだことも二人ゆみたちの他にいたから、ゆみたちを捨てようとしたの。」

「ひどい……！」

私は思わずそう呟いた。

「でね、ゆうが……。」

そう言いつて、ゆみちゃんは口を噤んだ。

「ゆうくんが……、どうしたの……？」

私は聞いてはいけないような気がした。けれども気づいた時には口から勝手に言葉が出ていた。

「みんなころしちゃったの。おじさんも、おばさんも、あのころも。」

ゆみちゃんは抑揚のない声でそういった。

「ゆみたちはね、怖くなって逃げたの。にげてにげて……でもね、食べるものも何にもなくて、二人とも死んじゃった……。」

「じゃあやつぱり……。」
幽霊なんだ……。

「うん。でもね、お姉ちゃんは優しいからね、なにもしないよ。他の人はみんなゆみたちを怖いとかいって追い出そうとするけど、お姉ちゃんたちはそんなことしないもの。」
ゆみちゃんは笑顔でそう言った。

「そっか……。」
いつ逃げようか……。

「なにもしない」その言葉が頭の中でぐるぐる回る。
危ない……。このままじゃ……。

ぎゃああああああああああああああああああああああ

断末魔の叫びが響いた。

「?!」

私は急いで押入れを飛び出した。

「まって!!お姉ちゃん!」

ゆみちゃんに背後から呼び止められたが、私は気にせず声がした方へ走った。

過去（後書き）

思った以上に長くなって・・・。
すみません；

崩壊（前書き）

一部残酷な描写があります。

苦手な人は？の下から読んでください。

「助けて！だれか・・・だれか！！！！」
そう言いたくても、絞り出した様な声しか出ない。

「ゆう、この人は殺さないであげよう？」
ゆみちゃんがゆう君を止めた。

「でも、ゆみ・・・。」
ゆう君が振り上げていた包丁をおろした。

「このお姉ちゃんは優しいよ？だから・・・ね・・・？」
ゆみちゃんはこの場に釣り合わない笑顔で言った。

「じゃあ・・・。」
そう言ってゆう君は包丁を手から離した。

そのすきに、私は玄関を飛び出した。
・・・逃げなきゃ、逃げなきゃ・・・！！ただそれだけを考
えて。

4年後、

「菜摘、様子はどう？」
母がお茶を飲みながら言った。

「うん、順調！順調！」

「菜摘、名前はどつする？男か女か、まだ分からないけど」
夫の祐二が嬉しそうに話している。

「それにしても、旅行から帰ったら菜摘が記憶喪失になっていて、あの時はどうなるかと思つたが、祐二君と結婚して、おまけに子宝にも恵まれるなんて、いやあ、本当によかつた。」
と父。

「本当ねえ、もうあれから4年も経つたのね。でも本当に、何事もなくてよかつたわ。」
母が続けて言う。

そう、私は4年前より昔の記憶が無いのだ。それまでのことが、何一つ思い出せない。

それから10ヶ月後、陣痛がきた。

私は激しい痛みをこらえて、無事に赤ちゃんを産むことができた。

「よく頑張つたな、菜摘。」

祐二が手を握り締めて私に言った。

「二人とも無事に生まれたぞ！」

「そう、よかつ・・・」

何かが一瞬、私の頭に浮かんだ。

「でも、男二人じゃなくて、男と女だから、名前は唯と唯美だな。」

何故だかわからない、とてつもない恐怖に襲われた。

崩壊（後書き）

すいません：かなりぐだぐだで・・・。

いまいちな終わり方になってしまいましたね（汗）

最後までお付き合いいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2108h/>

ピンポンダッシュ

2010年10月27日06時51分発行